

研究室の研究課題

日本各地に成立・展開した農業、および関連産業は、近世～近代における地域資源利用の技術的向上、システム確立によって実現しました。研究室では、このような地域資源の多面的活用システムを明らかにし、再評価することに取り組んでいます。この課題は①低迷する日本の食糧自給率・木材自給率の向上対策に対する基礎的研究、②開発途上国における持続的農林業発展の方法を解明するための比較的研究としての意義を有しています。本研究室は主に以下のような3つの具体的な事例地域と史料に基づいて研究を進めています。



研究のキーワード

地域資源利用システム・地域社会・地域資源の循環・人と自然との共生



在来産業と地域社会



農業の発展と日本の近代化



東北型社会の特質に関する研究

近世・近代・現代を通じた、日本における在来産業の展開と近代産業との関係を明らかにする事例として、①伝統的織物産地および、②甲州勝沼におけるぶどう栽培とワイン醸造業を中心に研究を進めている。フィールドワークを通じた史資料の分析に、ライフストーリーのヒアリング調査を加えて、日本の農家・農村における複合経営の実態、小規模家族経営の展開と意義を解明することに取り組んでいる。

近代都市の成立に伴って、野菜産地が形成されるが、これを支えたのが野菜の種子問屋であった。本研究室では、種子屋の経営・構造・展開に関する歴史的解明を進めている。選抜育種による「固定種」の育成と原種生産、近郊採種農家への種子増殖の委託、各地種子問屋との種子交換による品揃えの充実を背景に、種子問屋は全国の野菜農家に良質な種子を大量に供給し、野菜の産地形成に大きく寄与した。

近世初期の兵農分離、それに伴って成立したとされる現在に続くイエ・ムラは、日本の中央部の分析による理解であり、周辺地域には異なる型の社会が存在した。これを秋田藩領・秋田県を対象に究明しており、その社会を「東北型社会」と呼ぶことにする。林野に対する領主の特徴的な関わり方と国有林の創出、村々連合である親郷・寄郷制、本郷・支郷制という秋田を特徴づける地域社会構成、従来等閑視されてきた武士・士族が地域形成に果たす役割について明らかにしつつある。